

池の再生に向けての取り組み

茨城大学教育学部附属幼稚園（茨城県水戸市）

池の環境をもっとよいものにしたいと思案していた。池の環境を整えていきたいという考えがあり、今年度は年長組の活動の中で池作りを取り入れようということになった。子どもたちの目が池に向けられ池作りへと気持ちが動いていくように働きかけていった。

池の様子に気付く

築山での泥団子作り、海賊の家作り、虫探しなどの遊びを続けていく中で、子どもたちが池に関心をもつような状況を教師が意識的に作っていった。今まで池には無関心だった子どもたちが、池でサカマキガイを見つけたりアメンボを探したりするようになり、子どもたちと池との接点が見られるようになってきた。

池について考える

池に目が向けられるようになると、生き物がほとんどいないこと、雨が降っても水がたまらないことなど、池についていろいろな疑問が出てくるようになった。その疑問を皆のものとして取り上げ話し合う機会を設けながら、年長組全体の活動として池作りへの関心を高めていけるように支えていった（事例1）。

事事例1「生き物があまりいないよ」6月1週

6/3(木)北面の築山で5～6人の男児が泥団子作りをしている。草むらではハチやバッタを探している子どもがいる。水たまりでアメンボを見つけてきたA子が「池の中にもアメンボいるかな」と言いながら探してみる。

「あ、いたいたアメンボ」D男とK男が池の底からサカマキガイを見つけてきた。しかし、アメンボはいたが他の生き物がほとんどいないことに気付く。「生き物があまりいないね」と言うA子に「水がなくなってきたからだよ」とD男が答える。「どうして水がたまらないの?」とA子は不思議そうに尋ねる。D男も「どうして減っているんだろう?おかしいよね」とうなずく。そばにいた教師も「どうしてだろうね」と相づちを打つ。「調べてみようよ」と言うD男の言葉がきっかけとなって日々、池の水が減っていることに気付き疑問を抱くようになった子どもたちと一緒に池周辺のことについて調べてみることにした。教師は、一緒に遊びながら池の変化に気付くように見つけた生き物について一緒に調べ、わかったことをクラスの前で発表する場を作ることにした。

アメンボがあまりいないことを発見する

池の水が減っていることに気付き疑問を抱く

池の変化への気付き

池の変化への気付きを捉え他の子どもたちにも知らせる場を作る

考察

初夏の園庭にはたくさんの植物や昆虫が見られるようになり、豊かな自然の中で様々な出会いをしている。北面園庭で遊んでいた数名の子どもが「生き物が少ない」「水が減っている」という池の変化に気付き「なぜだろう」と疑問をもったことがきっかけとなって池の様子を調べてみようということになった。アメンボやサカマキガイを調べているうちに住みかや生態、適した環境などがわかってきた。生き物にとってどんな池が住みやすいのか共に考えたり調べたりしてわかったことをみんなに知らせる場を作った。それぞれが考えを言える機会を設けながら、一人の疑問をみんなのものとして取り上げ年長組全体の活動として池作りへの関心を高めていけるように支えていくことにした。



<その後の経過>

池について調べる

6年前に池を作った時の経緯や、ヤゴやカエルがいた当時の状況を話すと「昔みたいな池にしたいね」「トンボが卵を産んだり、サカマキガイが住める池にしたい」という声子どもたちから出てきた。そこで、池の周りを観察し池がどのように作られているか、現在ではどのような状況かなどを調べていった（事例2）。また、一人の女兒が6年前に池を作った当時、年長組だった兄から作った時の様子を聞いてきて皆に知らせる場を設けたりした。

「池を作り直そうよ」

自分たちと同じ年長組が池を作ったという話を聞いて、自分たちにもできるかもしれないという思いをもつ子どもが出てきた（事例3）。池を掘るのは簡単なことではないので、手だてを一緒に考えながら具体的にイメージを描いて意欲を高めていけるように支えていった。

池を掘る

いよいよ池を掘る作業に取りかかった。石や植物を取り除いて、ビニールシートをはがし、毎日少しずつ、子どもたちが代わる代わる来ては掘り進めていった。その活動の中で、池の中の植物や土の性質の違いなど様々な気付きの姿が捉えられた（事例4）。それらの気付きは、帰りなどの話し合いで発表しあったり、活動の様子を写真や文字で表して掲示したりして、池作りへの気持ちを持続していけるように支えてきた（事例5）。固い地盤のため掘る作業は難航したが、それでも9月中旬にはようやく池になりそうなほどの穴を掘ることができた。掘った池にはビニールシートを敷き、石を敷き詰めてモルタルで固めた。

水を入れて池の完成

モルタルが乾くのを待って水をくみ入れることになった。年長組全員で思い思いの容器に水を入れて運んだ。年長組が忙しそうに働く様子を見ていた3、4歳児も「やってもいい？」と言って手伝い始めた。年長組はできるだけ量のはいる容器を見つけてくるが、3歳児などはままごと用の小さなお茶碗だったりスプーンだったり。それでも年長組が「助かるよ」と言ってくれるので得意になって運んでいた。あふれそうになった池を前に歓声がわき上がった。

立て看板を作る

金魚の水替えの経験から、ためた水を2～3日おき、とっておいた水草を戻したり、サカマキガイを放したりした。「トンボくるかな」と毎日池の前で見張っていたT男の前にやがてトンボがやってきて卵を産んだ。大ニュースとなりヤゴに孵る日を待っていたところ3歳児が池に石を投げたことから命の大切さを話し、話し合いをもち看板を取り付けることになった。

まとめ

<子どもの学び>

- ・池として機能していない現状から再生へと思いをふくらませ、取り組みの中では池に関わる植物や生き物の生活について考える力を身に付けることができた。
- ・季節による変化や気象現象など、より広い視点で自然界のつながりに気付くことができた。
- ・生き物の成長過程に立ち会うことで、命の大切さに気付くことができた。
- ・教師が池周辺での子どものつぶやきや子ども同士のやりとりを拾い上げ、疑問を投げかけたり情報を提示したりする中で、子どもたち自身が池をどうしたいかという課題を見つけていくことができた。
- ・「池を作る」という一つの課題に向かっていくことで共に学び合い、生きる喜び（達成感、充実感）を味わうことができた。

<教師の学び>

- ・池の作り直しの取り組みでは、教師自身も未知の事柄が多かったため、子どもが考えたり共に考えていく状況を作るには、教師側の十分な学びが必要であることを実感した。
- ・池作りを通して知り得た知識や情報は、これからの自然とのかかわりの中に生かしていくための引き出しになった。
- ・専門家（環境アドバイザー）による研修会を通して、池作りに対する新たな知識を得ることができ、次年度への計画の方向性が定まった。トンボの生態について（卵を産む環境や時間帯）池の環境について（生物、植物、水に関すること）

みどころ

「池に関心を持たせたい」という教師の意図が遊びや生活の中で浸透し、水たまりのアメンボウを見つけたことから「池にもいるかな？」と予想し確認する行動が引き出されました。「やっぱりいた」と自分の経験から思った通りの状況があったことで、さらに「どうして他の生き物がいないの？」「どうして水がなくなっているの？」などと、知っていることと違う様子に疑問を感じて活動が始まっています。ここで気付いたことに教師が寄り添い、一緒に疑問を持ちながら丁寧に池の生き物にかかわり調べることで、子どもたちが生き物の生態を知り、共通の知識となって学級全体の取り組みに結びついていきました。

こうして、生き物が生きていくために必要な環境を整えなければいけないということが分かった子どもたちの活動は、みんなで池を調べて再生するという長い月日をかけての大きな取り組みになっていきました。「トンボが卵をうむまでに完成させたい」という具体的で大きな目標を持って意欲的に進めているので、池づくりの過程でも、さまざまな気付きや発見、試行錯誤をし、多くのことを学んでいることが分かります。

この事例の全文をご覧になりたい方は、プリントアウトもできます。